

総合政策学部 <令和4年度一般選抜 前期日程>

【出題意図】

超高齢社会、多死社会とされる現代社会において自ずと重視される「死」というテーマを取り扱った出題である。その上で論理的思考能力が問われる。

全体にわたり読解力、文章作成能力、数学的思考能力、また社会への関心、情報収集、論理的思考の各能力を問うている。特に、問1、問4では読解力、文章作成能力を問うた。問2では基本的な数学能力が問われる（総合政策学部においても一定の基礎的な数学処理能力は必須である）。また数字から現象を読み解く能力も重要であり、問3で評価される。

問5は定まった解答があるわけではないが、むしろ社会の事象を把握したうえでの論理的な記述解答が示されているかが重要となる。その上で、問題発見や論理的思考能力、文章作成能力が大きく問われるものである。

【解答例】

問1.

経済成長、人権保障、技術革新などを実現手段とし、生命尊重、自由の権利、個人の幸福追求をした価値観。（47字）

個人の充実した生の活動をかけがえのないものと考え、生命尊重や個人の自由、幸福追求を強く唱えたこと。（47字）

問2.

12. 2%

問3.

最初の年代では自宅死が多く、病院死の数倍となっている。しかし年代毎に自宅死は減り、逆に病院死は増えており、資料最終年の2018年には病院死は自宅死のおよそ5倍となっている。自宅死と病院死の割合が逆転するのは1975年から80年にかけてである。また平成に入り、老人ホーム、介護老人保健施設・介護医療院も少しずつ増えている。

問4.

アドバンス・ケア・プランニングを機会にして、医療者と患者が繰り返し話し合うなどコミュニケーションを深めていくこと。

問5.

とても難しいことである。なぜなら、死は、著者も記すように「個人の問題であるにもかかわらず、個人ではどうにもならない」からだ。しかし私は「個人ではどうにもならない」から死を考えなくてもよいとは思わない。むしろ死を考えることを通じて、生きることの意味や価値が見えることもあるのではないかと考える。また死は近代社会が排除してきたテーマでもあるようだ。ならば、近代社会における経済成長、人権保障、技術革新が解決をもたらさない現代に生きる私たちにとって、死を考えることから現代のいろいろな問題を解決する道が見えてくるかもしれないと思う。超高齢社会、多死社会という今の日本の状況は、もしかしたら死を考えさせる社会的な状況にあるのかもしれない。「死の一般論」がないというように、私自身も死に対して画一的な考えがあるわけではない。その時の環境や年代によって変化するものかもしれない。こうした死に対して、また死の迎え方に対して、一人で考えることも大事だと思うが、いろいろな人たちと対話、コミュニケーションを重ねる中で考えていくことも有効だと思う。答えは出せないかもしれないが、その中で、自分自身の死に対する考え方、迎え方が少しずつでも深めていくことができれば良いと思う。それが自分自身の人生をしっかりと生きる糧になると思うし、これからの社会の仕組みや形を作っていくヒントも出てくるかもしれないと思う。 (580文字)